原著

大学附属病院におけるヘルスアセスメント研修の有用性
Usefulness of Health Assessment Training in a University Hospital

渋谷洋子[1)]　蓮見昌紀[2)]　大門尚子[1)]　福井千晶[1)]　川上あずさ[3)]
[1)] 奈良県立医科大学　看護実践・キャリア支援センター
[2)] 奈良県立医科大学附属病院看護部
[3)] 奈良県立医科大学医学部看護学科

Yoko Shibuya[1)] Masanori Hasumi[2)] Naoko Daimon[1)] Chiaki Fukui[1)] Azusa Kawakami[3)]
1) Nursing Carrier Support Center, Nara Medical University
2) Department of Nursing, Nara Medical University Hospital
3) Faculty of Nursing School of Medicine, Nara Medical University

要旨

本研究の目的は、卒後２・３年目看護師を対象とした「ヘルスアセスメント研修」受講者のアンケート記載内容から、研修の効果および看護師教育への示唆を得ることである。研究方法は、質的帰納的分析とし、過去５年間のアンケート記載内容を分析した。結果、記載内容は研修で最も学べたことと、研修で得られたことに大別された。学べたこととして、患者の＜全体像を把握することの大切さ＞と＜患者の立場で考える大切さ＞が全年度で抽出できた。＜退院後の生活を見据えた情報収集の必要性＞は、2017 年度より抽出された。研修で得られたことについては、自己の振り返りから、＜自己の知識不足＞＜自己の課題の気づき＞等が抽出された。今後の研修において、看護の基本となる変わらないものと変化していくものを考慮して企画していく必要がある。さらに、集合研修による意見交換は、受講者のリフレクションとなり看護実践能力を高めていくことにつながるが、メンバー構成を考慮する必要性や教育・サポート体制の充実も示唆された。

キーワード：ヘルスアセスメント研修　卒後２・３年目看護師　大学附属病院

Abstract

Using the questionnaire survey conducted on participants of the Health Assessment Training Program for nursing graduates with one-two years' experience, this study aimed to obtain information on the effectiveness of the training program and its implications on nurse education. The study used qualitative inductive analysis as a research method, and the results were organized into two categories: what the nurses learned most and what they gained from the training. The most important concepts learned throughout all five years of training were "the importance of understanding the patient's complete picture" and "the importance of thinking from the patient's perspective". The "need to collect information with an eye on life after discharge" was extracted from FY2017. "Insufficient knowledge" and "Awareness of one's challenges" were extracted from self-reflection as an answer to the question, "What was gained from the training?" In future training, it is imperative to plan for what will remain unchanged as the basis of nursing and what will change. Furthermore, exchanging opinions in

group training sessions will cause participants to reflect on and enhance their practical nursing skills. Therefore, there is a need to consider the composition of members in a group and the enhancement of the education and support system.

Keywords: health assessment training, nurses with one-two years' experience, university hospital

1．研究背景

2022 年 3 月、第 111 回看護師国家試験の合格者は、約 5 万 9 千人であり看護基礎教育を終えて看護師が誕生した。その後就業する看護師は、専門職として看護継続教育を受けることが多い。日本看護協会（2012）は、専門職である看護職が、個々に能力を開発、維持・向上し自らキャリアを形成するための指針として継続教育の基準 ver.2 を作成している。この継続教育には所属施設内で企画・実施される院内教育と日本看護協会などが企画する病院外教育があるが、いずれにしても看護部組織の目的達成のための職員の能力開発が期待される（森田、2018）。

病院によって担う役割は異なるが、急性期病院は緊急や重症の患者を中心に高度な医療を担う。在院日数の短縮も求められ、看護師には観察力や外来受診時からの退院支援、地域との連携、退院後の生活を見据えた看護介入等幅広く高度な能力が求められる。特定機能病院として高度医療・先端医療の推進、さらに基幹病院としてあらゆる疾患に対応している A 大学附属病院では看護記録様式として患者状態適応型パスシステム（PCAPS）を導入している。これらは観察項目やケア項目は明確であるが、アセスメント能力が未熟である場合、個別性のある看護ケアや具体的な退院支援につなげることが難しいという課題がある。そのため、患者の日常生活援助や社会復帰への介入を行う上で、ヘルスアセスメント能力は極めて重要であると考える。

日本看護協会は、継続教育の対象者を、新人看護職員、ジェネラリスト、スペシャリスト、管理者、教育者・研究者としている。A 大学附属病院では、ジェネラリストである卒後 2～3 年目看護師を対象に 2014 年度から「ヘルスアセスメント研修」を実施してきた。卒後 2 年目の看護師の継続教育に関する研究については、リフレクションに注目した岩本ら（2020）、朝日奈ら（2020）の研究や、組織適応の過程について（鈴木、2020）、役割期待と役割葛藤（久保寺、2014）成長発達過程（内野ら、2017）等の研究が報告されおり、2 年目看護師の自己の振り返りや適応という意識の変化や負担に注目した研究が多い。このように、2 年目の看護師に関する研究が看護師の内面の変化に注目される背景については、新卒看護師の離職問題を背景に新人看護職員研修制度が努力義務となりガイドラインが作成され（厚生労働省、2010）新人看護職員に対する医療機関の取組が改善・充実してきた。一方で 2 年目看護師の卒後教育に関しては支援不足への危惧（佐々木、2013）や 2 年目看護師への卒後教育が施設に委ねられている現状（西、2018）があると考えられ、研修を企画・実施する看護部にとって研修内容の精選や方法について課題は多いと考えられる。A 大学附属病院では、病院の役割をふまえ医療の変化、社会の変化、看護実践能力の獲得を目標に研修を企画・実施する必要がある。そこで、本研究では継続して実施してきた研修の教育効果を明らかにし教育への示唆を得たいと考えた。

2．研究目的

卒後 2～3 年目看護師を対象とした「ヘルスアセスメント研修」、過去 5 年間の受講者のアンケート記載内容から、教育効果を経年変化で明らかにすることで、研修の効果および社会の変化を考慮した看護師教育への示

唆を得る。
看護におけるヘルスアセスメントは、「健康状態を生活のなかの健康ととらえ、日常生活行動の視点から情報収集・査定をしていくこと」（大久保、2016）とした。

３．研究方法

１）研究対象

2014～2018 年度「ヘルスアセスメント研修」受講者 326 名のアンケート記載内容。アンケート内容は、①研修内容で最も学べたこと②研修内容で難しかった点③活用度とその理由④研修後のチャレンジ目標であった。アンケート（A4 用紙１枚）は研修終了時に記載してもらい、回収した。

研修は、次のように構成した。

講義編：ヘルスアセスメントの視点で患者の全体像を捉えるために、ヘルスアセスメントの目的や枠組み、全体像を捉えるための情報収集の仕方等について講義を実施した。

演習編：事例を基に「身体に起こる変化」「生活上の変化」「心理的な変化」の視点で情報整理とアセスメント、具体的な援助の内容を自己学習し、グループワークでさらに内容を深めた。事例は次の３事例とし、発達段階や性別、疾患が偏らないよう配慮した。

①パーキンソン病で内服調整とリハビリ目的で入院となった 57 歳男性の事例。②血友病Ａのため血液製剤を注入しながら大学生活を送っていた 20 歳男性。サークル活動中に怪我をし、止血目的で入院した事例。③75 歳女性。80 歳夫と二人暮らし。胃がん手術のためクリティカルパスに準じた入院事例。

研修で使用した記載様式については、以下に示す（資料）。

２）分析方法

アンケート記述内容を意味のある文章に区切り（コード化）、２段階で抽象度を上げてカテゴリ化した。カテゴリの抽出は、研究者全員参加のディスカッションにより内容、表現の一致を得て信頼性を確保した。

資料　研修の記載様式

１．ヘルスアセスメントの枠組みを使用し、情報の整理をおこなう

身体に起こる変化	生活上の変化	心理的な変化

２．アセスメント

３．具体的な援助方法

３）倫理的配慮

本研究は、過去の研修参加時のアンケートをデータとする後ろ向き研究であることから、院内の指定の場所に研究協力説明文書を掲示し研究参加の拒否ができることを保障した。A 大学医の倫理審査委員会の承認を得て（受付番号 2470）実施した。

４．結果

アンケートの記載内容から、505 の意味のある文章を抽出し、「研修で最も学べたこと」と「研修で得られたこと」に大別した。カテゴリを＜　　＞で示し、継続して抽出した場合は➔とする。

１）研修で最も学べたこと

「研修で最も学べたこと」についての記述内容から抽出した年度毎のカテゴリを、表１に示す。

実施年度毎に【情報収集】【アセスメント】【看護介入】の看護のプロセスに沿って分類し、【情報収集】では、2014～2016 年で＜個別性をふまえた情報収集の大切さ＞、2017～2018 年では、＜退院後の生活を見据えた情報収集の必要性＞等のカテゴリが抽出された。

表１．研修で最も学べたこと

カテゴリ/年度	2014	2015	2016	2017	2018
情報収集	ヘルスアセスメントの視点で情報収集する大切さ				
	個別性をふまえた情報収集の大切さ				
				退院後の生活を見据えた情報収集の必要性	
アセスメント	ヘルスアセスメントの視点で患者を理解すること				
	全体像を把握することの大切さ				
	患者の立場で考えることの大切さ				
			退院後の生活に目を向けることの大切さ		
看護介入	ヘルスアセスメントの視点で患者を捉え援助につなげる大切さ				
	個別性を考えた介入の大切さ				
		全体像を把握し援助につなげる大切さ			
		退院後の生活を見据えて介入することの大切さ			
			発達段階をふまえた介入の大切さ		
			患者のニーズを理解し介入することの大切さ		
				根拠をもって看護を行う大切さ	
				患者のできているところに目を向けた援助の大切さ	

【アセスメント】では、＜全体像を把握することの大切さ＞＜患者の立場で考えることの大切さ＞等が全年度を通して抽出され、2016 年以降＜退院後の生活に目を向けることの大切さ＞が抽出された。

【看護介入】では、2014～2016 年までの＜個別性を考えた介入の大切さ＞に加え、2016 年以降＜発達段階をふまえた介入の大切さ＞等が認められた。2017～2018 年では、＜根拠をもって看護を行う大切さ＞＜患者のできているところに目を向けた援助の大切さ＞が抽出された。

２）研修で得られたこと

研修年度毎に５～１２のサブカテゴリを抽出し、５～８のカテゴリを抽出した。表２、「研修で得られたこと」に示す。

2014 年～2018 年を通じて＜意見交換による新たな視点＞と＜自己の知識不足についての気づき＞が抽出され、2014 年からの４年間では、＜自己の課題の気づき＞が抽出された。その他、単年度抽出のカテゴリとしては、＜チームで看護しているということ＞＜患者と医療者間でズレがある場合があり、確認することが大切＞＜自己のアセスメント力を高めることの大切さ＞等があった。

５．考察

１）研修で最も学べたこと

研修の目的である全体像を把握すること、患者の立場で考えることの大切さなど、看護の基本となる内容は全年度で学べている。A 大学附属病院では看護記録様式として患者状態適応型パスシステム（PCAPS）を導入している。このシステムを使用し看護ケアをすすめる場合、患者の状態や治療方針を選択することで観察項目やケア項目は明確となる。しかし、情報収集やアセスメント能力が未熟である場合、偏った情報収集やアセスメントにつながる可能性があり、全体像をとらえ個別性のある看護ケアや具体的な退院支援に

表２．研修で得られたこと

カテゴリ/年度	2014	2015	2016	2017	2018
継続して抽出できたカテゴリ	意見交換による新たな視点	→	→	→	→
	自己の知識不足についての気づき	→	→	→	→
	自己の課題の気づき	→	→	→	
	自己の看護を振り返る機会	→	→		
単年度抽出のカテゴリ	自己のアセスメント力を高めることの大切さ	患者の視点で考える機会	気づきがないとケアができないということ	事例に対する具体的な援助方法	患者と医療者間でズレがある場合があり、確認することが大切
	業務がルーチン化していたことへの気づき	チームで看護しているということ	発達段階・個別性の重要さ	患者を一番に考える看護ができていなかったことへの気づき	患者が退院後の生活に不安を抱えているという気づき
		援助につなげる患者とのコミュニケーションの大切さ			看護師同士でも認識のずれがないよう意識を統一する必要性
		具体的援助方法を考える難しさ			

つなげることが難しい。そのため、＜全体像を把握することの大切さ＞と＜患者の立場で考える大切さ＞が全年度で学べていたことは評価でき、ヘルスアセスメント研修での学びは有用であると考える。ベナー（2005）は、２、３年働いた看護師を、一人前レベルとし意識的に立てた長期の目標や計画を踏まえて自分の看護実践をとらえ始める時期、としている。病院のシステムを把握し看護処置やケアが自立して実践できるようになったこの時期に、あらためて患者の全体像の把握や患者の立場で考える大切さ、個別性の大切さといった、患者中心の看護の重要性の再認識ができたことも研修の有用性として評価できる。

一方、情報収集・アセスメント・看護介入の看護のプロセスにおいて、2016 年度より＜退院後の生活に目を向けることの大切さ＞、2017 年度より＜退院後の生活を見据えた情報収集の必要性＞と、患者の退院後の生活に着眼点をおいた学びが認められた点については、診療報酬の改定による地域包括ケアシステムの推進・退院支援の促進等社会情勢の変化に影響を受けたと考えられる。

今後の研修において、看護の基本となる変わらないものと変化していくものを考慮して企画していく必要がある。さらに、研修を継続していく上では、医療を取り巻く社会情勢の変化に合わせた研修内容の検討を行っていく必要があると考える。

２）研修で得られたこと

研修方法の「講義編」「演習編」の構成は、ヘルスアセスメントの知識について想起し、共通理解やヘルスアセスメントの視点の意識づけ・思考の整理、知識や思考の共有・拡大につながっており、学習効果のある方法であったと考える。集合研修での意見交換は、＜自己の看護を振り返る機会＞となり、受講者がリフレクションする機会として重要な位置付けとなっていた。リフレクションは、看護実践を振り返ることによって看護実践能力を高めていく思考様式である（田村2017）とされることから、自己の振り返りのみならず、看護実践を振り返ることに意味がある。また、受講者は、集合研修で共通の課題を基にディスカッションすることによって個人では気づかなかった視点に気づき、意見交換により患者と医療者間のズレ、看護師同士の認識のズレに気づくなど、看護の視野の広がりが確認できていた。リフレクションの概念分析では、“信頼できる仲間の存在”（菱沼、2011）が要件として挙げられていることから、入職時期がほぼ同時期のメンバーによる研修であることも成果につながったと考えら

れる。

自分を振り返ることによる、＜自己の知識不足についての気づき＞＜自己の課題の気づき＞等の気づきは鈴木（2020）のいう新たな経験による能力不足の実感に通じる内容であると考えられる。鈴木は、このことについて、２年目の役割に対する期待と現実とのギャップととらえている。意見交換による気づきや看護の視野の拡がりによる精神的負荷が生じることも考慮する必要がある。しかし、不足していることに気づくことは、学習方法や具体的援助方法を考える機会となり、主体的な学習や今後の看護に対するモチベーションの維持・向上に繋がると考えられる。それを支援するためには、ロールモデルになる先輩看護師の存在や教育・サポート体制が充実している組織風土等によって組織適応の過程（鈴木、2020）を促進させるという着眼点をもつ必要性もある。

集合研修で行う対話は意見交換の大切さや新たな視点を得る貴重な機会になっているが、その成果を上げるためにはメンバー構成を考慮する必要がある。また、コロナ禍においてリモート研修への変更が増えてきている。リモート下でのディスカッションにおいては対面の時に得られていた対話が難しい場面もあるのではないかと考える。会話やファシリテートのタイミング等リモート下での有効なディスカッションについても今後は検討が必要である。WITH コロナを意識し、感染対策を講じた研修の開催が必須であると考える。

６．結論

過去５年間の「ヘルスアセスメント研修」の受講生のアンケートの記載内容から、患者の＜全体像を把握することの大切さ＞と、＜患者の立場で考える大切さ＞が全年度で学べていたことは研修の目的を達成できており、本研修による学びは有用であると考える。また、２～３年目の看護師に対する研修内容としても有用であったと評価できた。2017 年度より＜退院後の生活を見据えた情報収集の必要性＞のように、患者の退院後の生活に着眼点をおいた学びが認められた点については、社会情勢の変化に影響を受けたと考えられる。

今後の研修において、看護の基本となる変わらないものと変化していくものを考慮して企画していく必要がある。さらに、研修を継続していく上では、医療を取り巻く社会情勢の変化に合わせた研修内容の検討を行っていく必要があると考える。

集合研修による意見交換は、受講者のリフレクションとなり看護実践能力を高めていくことにつながるが、意見交換による気づきや看護の視野の拡がりにより精神的負荷が生じることもあることから、メンバー構成を考慮する必要性や教育・サポート体制の充実も示唆された。

尚、本研究は自由記述によるアンケート内容をデータとしていることから、記載内容の背景や文脈を把握することに限界があった。面接調査により詳細な内容や背景を把握するなど、データの質を高め研究を発展させることも検討する必要がある。

本論文は、第 41 回日本看護科学学会学術集会（2021 年 12 月）において発表したものを加筆修正した。

利益相反

本論文に関し開示すべき利益相反の事項はない。

引用文献

朝日奈まこと, 平木民子（2020）：看護師２年目初期における反省的実践. 香川県立保健医療大学雑誌. 11. 25-34.

Benner. P（1984）：From Novice to Expert Excellence and power in Clinical Nursing Practice. Commemorative Edition” 1st ed. 井部俊子監訳（2005）：ベナー看護論-初心者から達人へ-新訳版、医

学書院.
菱沼由梨（2011）：看護におけるリフレクションの概念分析.医療看護研究会誌 8(1).78,2011.
久保寺芳枝（2014）：卒後２年目看護師の感じる役割期待と役割葛藤.神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究収録.39.133-139.
厚生労働省（2014）：新人看護職員研修ガイドライン https://www.mhlw.go.jp/seisaku/2010/01/04.html(accessed 2022-02-24)
森田敏子,魚崎須美,早川佳奈美他(2018):看護基礎教育と看護継続教育の歴史的変遷からみた専門職としての看護キャリア形成.徳島文理大学研究紀要.95.95-114.2018.
日本看護協会（2012）：継続教育の基準 ver2,https://www.nurse.or,jp/nursing/education/keizoku/pdf/keizoku-ver2.pdf（Accessed 2022-02-24)
西千秋（2018）：２年目看護師教育に関する文献検討.大阪医科大学看護学研究雑誌.8.84-91.
岩本実里,木村佳奈美,伊藤成美他（2020）：卒後 2 年目看護師の継続教育方法の検討 - リフレクションを取り入れて.静岡赤十字病院研究報.40（1）1－11.
大久保暢子(2016)：日常生活行動からみるヘルスアセスメント - 看護形態機能学の枠組みを用いて.日本看護協会出版会.2.2016.
佐々木幾美（2013)：新人看護職員研修制度開始後の評価に関する研究,平成 24 年度総括研究報告書, https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000077516.pdf.(Accessed 2022.02-28)
柴田秀子（2003)：看護専門職の継続教育.聖路加看護学会誌.7（1）.24-33.2003.
鈴木洋子（2020）：卒後２年目看護師の組織適応の過程-組織の働きかけ.個人の行動とその変化に焦点を当てて-.武蔵野大学看護学研究所紀要.14.1-10.
田村由美,池西悦子（2017）：看護の教育・実践にいかすリフレクション.南江堂.
内野恵子,石塚淳子,酒井太一（2017）：２年目看護師の体験から考える成長発達過程.順天堂大学保健看護学部順天堂保健看護研究.5.59-66.